

## ◆ 基礎情報

計画名	金融リテラシー向上を目的とした金融教育のあり方の考察
実施責任者	ビジネス学部ビジネス学科 南波 浩史
対象者	ビジネス学部ビジネス学科 3年 7名
実施期間	2025年4月～2026年1月

## ◆ 取組み概要

少子高齢化が進展する日本では、老後2000万円問題に代表されるように公的年金や老後の生活資金に対する不安が高まっている。また2024年よりNISA制度が新しくなり、社会人だけでなく学生も資産運用や投資に対する関心も高まりつつあり、政府も自己責任の考え方に基づく老後へ向けた資産形成を制度として積極的に進めているのが現状である。しかし、日本の家計金融資産は銀行預金を中心とした安全資産に偏っており、株式に代表されるリスク性資産への運用比率は欧米諸国と比較して低いことから、金融リテラシーを高めるための金融教育の重要性が注目されている。こうした背景に基づき、ビジネス学部3年生の「3年ゼミナール」を履修する学生が、ゼミ活動において金融リテラシーやその向上を目的とした金融教育のあり方について議論することにより、現状の課題認識のみならず今後に向けた政策提言を行うことを目標として取組みを行った。本取組みは大学内での学習が中心であるが、6月に開催された春季セミナー大会（関東地区の大学より11ゼミが参加のディベート大会）や12月に開催された証券ゼミナール大会（全国の大学より92ゼミが参加）へ参加することにより、教室での活動を中心とする本取組みで得られた成果を、大学外での活動へも応用することによって、より一層の学修成果の実践を行った。

## ◆ 取組み全体の流れ

本取組みは3年ゼミナールでの活動が中心であるため、新年度の始まりである2025年4月から2026年1月にかけて行った。

4月から6月にかけては、春季セミナー大会でのディベートテーマである「企業は自社株買いを行っていくべきか」について、投資家や企業の視点を中心に、肯定・否定双方の立場から立論できるよう、論点整理および配布資料の作成を行った。基本的な言葉の定義やデータについてのチーム内での共通理解から始め、プレゼン資料の構成やその作成、想定される反対意見やそれに対する自らの主張の確認など、主催者が掲げるテーマに関する論点をチーム全体で目標設定および共有し、それぞれのゼミ生の役割分担に応じた準備を行い、当日のディベートに参加し、その後、当日の取組みに関する振り返りを行った。

7月から12月は、証券ゼミナール大会での1つのテーマである「金融リテラシーと金融教育」について、大学内でのゼミの授業時間だけでなく、夏休み期間も大学外においても取組みを継続した。家計が投資する意義や日本人のマネー観、リスクとリターンとの関係を中心とした金融リテラシーの必要性、NISA や iDeCo といった税制優遇制度拡充の現状や課題、資産形成促進のために必要な制度や金融商品のあり方、といった主要な論点について、ゼミ生間での議論を積極的に行い、10月までにA4用紙30枚以内という論文を執筆し、その論文を要約したプレゼンテーション動画を11月までに作成した。

こうした一連の取組みを踏まえ、12月に東京で開催された証券ゼミナール大会へ参加し、他大学のゼミ生とのディスカッションを行った。その後、ゼミ生各自およびチームとしてのゼミ生間での振り返りを行うことで本取組みを終了した。

## ◆ 取組みの成果

2025年12月に開催された証券ゼミナール大会（主催：全日本証券研究学生連盟主催、協賛：日本証券業協会）へ提出した論文である。証券ゼミナール大会は5つのテーマ（ブロック）に分かれており、本取組みでは第4テーマである「個人投資家育成に向けて：金融リテラシー向上・税制優遇制度の検討」という主催者側が設定したテーマに基づき論文を執筆し提出を行った。

開催当日は各大学が事前に提出した論文に基づき、1ブロックにつき6大学のゼミナール参加者が10時から19時までの長丁場に渡って活発な議論を行った。

[論文 - Google ドライブ](#)（第4テーマ：Aブロックに成果物の論文）

## ◆ リーダーシップ教育に関する実践

共立リーダーシップの意識づけ、目標設定の活動	本取り組みでは、春季セミナーや証券ゼミナール大会といった大会主催者が、議論のテーマや論点、ディベートやディスカッションに関する具体的な運営方針やルールを提示している。このため参加学生であるゼミ生は、大会当日までの準備段階においては、自らの課題に対する時間管理や短期および長期的な目標の設定といった面で比較的容易に実行可能であったことから、ゼミ生各自の役割に応じた活動の中で、進捗具合の異なる他のメンバーに対する率先垂範や相互支援も積極的に取り組んでくれたと感じる。
協働活動	大会への準備段階での取り組みでは、ゼミ生自らが目標の設定と共有を行うことで、当面取り組むべき問題の整理を行うことができた。このことから、資料収集を行うなかで各自が意見を出し合い、チームとしての議論の軸を作り出すことによって論文作成を協働で行うことに貢献できた。またこの取り組みを通じて、ゼミ生自身がチームの中で何を行うべきかを考え行動をとっていた。例えば、自分は話し合いの方向性をサポートする役割で貢献しようとした学生や、チーム内で意見が割れた時に論点を整理し双方の意見を言語化することで議論を前に進める役割を担うことができた、という学生もいた。
共立リーダーシップの観点での振り返り	ゼミの授業時間を中心とした論文執筆に代表される準備段階では、先に述べたように比較的うまく取り組むことができた。しかし大会当日の取り組みでは、事前に準備した内容について発言することはできたが、他大学からの事前に準備していない想定外の質問に対しては、チーム内の全員が対応することができなくなってしまった。このように、ディベートやディスカッションといった短時間において、目標設定と共有を行い、相互支援や率先垂範を実践できたかについては、大いに問題点として残った。この点は大変難しい行動であるが、短時間のチーム内での協働活動については今後の課題である。

## ◆ 学生の成長に関する総括

本取り組みに対する学生の振り返りの意見としては、チーム内で意見を出し合いながら回答を導き出した場面では協力して議論する楽しさを実感することができた、チームの緊張を和らげるために場の雰囲気づくりを意識して行動した、他大学の学生と意見交換を行いチームで1つの成果を作り上げた経験は非常に貴重だと感じた、といったような、チームやチーム活動を意識した感想を述べる学生が多くあり、共立リーダーシップの実践という取り組みを通じて、学生の成長に繋がる成果があったと考えられる。

しかし、特に大会当日の活動では、議論に対して受け身になってしまい積極性に欠けていたや、状況に応じて一歩踏み出す姿勢が不足していた、他大学と比較し発言回数が少なかった、といったような反省点の意見もあった。この点は一朝一夕で改善するものでないと思うが、今回の取り組みをきっかけに、初対面の人に対しても自分の意見を発言できる場を少しでも作っていきたいと考えている。

## ◆ 取り組みを通じた全体の所感

本取り組みを通じて、授業内における大会への準備段階の取り組みに関しては、共立リーダーシップの実践が概ね達成できたように考えるが、大会当日の取り組みにおいては課題が残るものであった。また、学術的な理論に関する理解度や即興で発言内容を考え構築する力、といった点については、学生一人一人の能力を向上させる必要性を新ためて考える機会となった。学問的な知識を踏まえた上で、現在の社会情勢と関連させながら自分たちの意見を述べることの難しさや重要性を再認識できた。

今回の取り組みは3年ゼミナールの授業を中心とした取り組みであるが、ゼミの活動を大学内での授業としての活動にとどめず、授業外の活動として、同世代である他大学の学生と議論することによって、日々の活動の成果を実践し体験してほしいと考えており、今後もこうした取り組みを継続していきたいと考えている。

## ◆ 今後の展開

今後についても、ゼミナールで行った実践の成果を証券ゼミナール大会や春季セミナーといった大学外のイベントへ参加することにより、学生自身の共立リーダーシップの成長に繋げていきたい。また、ゼミで実践した今回の取り組みは、通常の講義科目においても一部取り入れることが可能であることが明らかになったため、授業内でのグループワークやプレゼンテーションといった取り組みにおいて、応用的に活用していきたいと考えている。